

# 眞生

第九卷 第四號

- 四月八日が釋尊の誕生日に當ることは恐らく日本の佛教徒が誰一人知らぬ者はないことでありませう。乍然その誕生日が本當の意味に於て私共にどんな關係を持つかを充分に考へた人が幾人あるであらう。
- かう考へて見れば今日の佛教徒は多くの場合眞に釋尊の佛教を自ら体得する人は甚だ少いかに思へてならぬのであります。
- 否それどころか、ともすれば自ら佛教の信者であると思つてゐる人にして、其の實釋尊の心を去ることの甚だ遠い人さへあることは常に私共の歎きであります。
- そもそも釋尊の佛教は從來の宗教に對しては實に宗教界に於ける一大革命でありまして、人類生活に於ける自覺史に於ては正に人類生活の一大轉回であつたのであります。
- 即ちそれまでの世界の宗教は悉く人間が自分以上の神の崇拜でありましたが、釋尊の宗教はそれらの迷信を打破して自らの中に神の生活を始むることでありました。
- 然に今ごきの人々は此の釋尊の教へを忘れて、またともすれば自ら神たるの生活を忘れて、再び神の奴隸とならうとしてゐます。乍然之は釋尊の宗教ではありません。
- 従て、念佛を中心とする淨土教の生活も其の實は自ら佛たるの生活にあることを決して忘れてはならぬことでもあります。釋尊の誕生は即ちそれを記念するの一大記念塔と云ふべきでせう。（念）

目次

善悪の標準	念
本尊がない	魁子
念佛と生活	土屋 観道
理想と現實	土屋 観道
行基寺三昧會雜感	土屋 観道
偶感	觀道
念佛三昧會所感	高子
吾朋便り	

善悪の標準

- 一口に善とか悪とか云ふけれども、みんなものが善であり、悪であるかをこゝに定める云ふことは甚だ困難なことでもあります。
- 乍然一般に多くの場合には自分に考へて都合がよいと思ふことを善と考へ、都合の悪いと考へるものを悪と考へることもあるがそれは主として自分の都合から割出した考へであります。
- 然に一方では自分に都合よいことを考へるのは利己主義として之を悪み、自分を犠牲にして他の人の爲めに盡すことを善だと考へてゐる人もあります。之は主として他人の都合から割出した考へであります。
- 乍然自分の爲めに人を害することが悪いのに、他の爲めに自分を害することが何故悪くないでせう。自他共によくするのが本當の道ではないでせうか。
- 佛教では自利々他圓滿と云つて居ります。私は之を全体が一つとなつてよくなる道として、これを全一の生活と申して居ります。

(念)

- 家の中に佛様が神様が位い祀つてない處はありません、然しそれが本當に家の本尊様になつてゐるでせうか、自分の生活の本尊様になつてゐるでせうか。
- 何かの折には手も合せて拜みます、お念佛も申します、而し本當に本尊様にしてゐるでせうか。家の中の一つの飾り、朝夕の一つの習慣になつてゐる丈で、本當にその一點へ悉くが集中され、その一點から悉くが湧き出でゐるでせうか。いつも無本尊、無中心の乱脈を極めていやしませんか。
- 食ふ時は食ふ事に夢中になつて本尊様を忘れてゐます、着物の柄見る時は柄見る事に夢中になつて佛様の有る無し金の有る無しも忘れてゐます、金儲ける時は儲ける事に夢中になつて嘘八百を並べてゐます。況んや金を握つた時、飲みに行く時、遊びに行く時、喧嘩やる時、競争する時、一人居る時、澤山で騒いでゐる時、樂な時、苦な時、健康な時、大病な時、閑な時、忙しい時、一切の時に本尊様を御留守にして獨りやりたい放大をやつてゐます、そしてやり損なくば四苦八苦で、ますます脱線し、ますます轉倒して狂亂して居ります。
- 何の爲めに本尊様を祭つてゐるのです、まさか死んでから先きで助けて貰ふが爲めではありません。又行詰つてから後で屍拭ひさせるが爲めの神様ではありません。すれば本尊とは始終胸に懸けてゐることであり、心に祀つてゐることでもあります。心に祭つてゐる現はれが神棚を飾り、お佛壇を買つてまで拜む譯であります。神道の方が「吾がこゝろをまつれ」と謂はれました。我れ乍ら吾が本心の「神」に恭敬合掌してゆくのでなくては「信じてゐる生活」ではありません、自分乍ら自分の本心に頭が下り、自分の本心に掌が合はまつて行くのでなくては、何を拜んでも何をまつても一つの道樂醉興に過ぎません。
- 釋尊は常に「法を燈火とし、自己を燈炬とせよ」と云つて居られました、總ての上に現はれて總てのものを率いてゐられる「宇宙の大法」、そしてその大法が自己の上に現はれてゐる「自己そのモノ」を基調として、振舞つてゆく生活でなくては統一がありません。統一のない生活はいくら眞剣でも盲目的刹那生活であります、だから常に幻滅に幻滅を重ねて行く輪廻變轉の生活であります。
- 又我れ父にすみ、父我れにすむ、父と我れと一なり」と云つてゐられたイエスは「我れは途なり、我れ眞理なり、我れは生命なり」と神一になり、神の生活をしてゐられた。それがお念佛の生活であり、信仰の生活であります。(魁子)



# 念佛と生活

土屋 觀道

□念佛と云へば今までの人々は多くの場合死後の爲めの宗教かと思ひ、また愚夫愚婦の宗教であるかと思ふ人が多いやうである。

□乍然世の中に若し誤りと云ふものがあるならば凡そ此の世に於て、之ほどの誤りと云ふものは恐くあるまい。それは念佛に對する考へが全くその實際と相反してゐるからである。

□念佛は果して死後の爲めの宗教であらうか、否、若し一步を譲つて之を死後の爲めの宗教とするも、若しその人にして念佛が死後の爲めの宗教として役立つならば己に之を得た人と未だ之を得ない人との間には己に此の世から大いなる異いがあるではなからうか。

□即ち己に得たる人には其の得たる信仰の反影は明にその人をして死後を恐れぬ信仰の確立はそれだけ其の人をして此の世から死後に對する不安を破つて、死後永生の喜びをその人に與えてゐるではあるまいか。

□而も死後の往生を信する信者の心には此の世で得られない永生の望みを己に此の世から確得し得た

るが爲めに、それだけ今世に於ける人生の意安があり、此の世を楽しむ眞實の生活もあるではないか。

□然にそれを知らないで、念佛を以つて死後の宗教として之を輕じやうとすることは未だその人に死後の宗教がいかによつて此の世を益するかを知らない考へと云ふべきである。

## 二

□而も念佛を以つて、愚夫愚婦の人のみの信する宗教の如く考へて、自分をその中に入れたいのはむしろ念佛に對する自己の無智を表白すると同時に、いかに自分の生活を智人の生活の如く思へる自らの不遜を表はしたものと云ふべきであらう。

□否、少くともそれは未だ眞實の淨土教の教へを知らない、傲慢無禮の無智の少人のたわごに過ぎないものであつて、世に之ほどの愚かなる人はないのである。何となれば此の世に於て、自分の愚を知らないで人の愚を笑ふ人ほど愚かなるものはないからである。

□かと思つて、私共の念佛を以つて、死後の宗教でないと思ふのもない、また、念佛を以つて愚夫愚婦の宗教でないと思ふのもないことはもとよりである。

□乍然私共の念佛は少くともそれらの人々の難するやうな、單なる意味での未來教でもなく、また、それらの人々の云ふやうな單なる愚夫愚婦の宗教でないと思ふべきである。

## 三

□然ば本當の意味での念佛とはどんな意味での念佛であらうか。それは正しく如來の本願の上に成就

せられた眞實の念佛であつて、此の世から永遠を救ふところの生ける宗教である。未來を救ふて此の世を救はぬ宗教でもなく、此の世を救ふて未來を救はぬ宗教でもなく、此の世と未來とを併せて救ふ眞實の宗教である。

□だから、此の世ばかりの宗教でなく、未來ばかりの宗教でもなく、此の世から未來へかけての一切を含んだ宗教であつて、あらゆる人生の理想をその中にこめたる宗教である。

□また愚夫愚婦の宗教と云ふが、その愚夫愚婦と云ふのが何を中心として愚夫愚婦と云はれるのか、それはいかなる意味に於てもそのことを以つて悪しざまに批難せらるべきものではなくて、むしろ、いかなる愚夫愚婦でも救はれると云ふ意味の尊い意味での宗教でなくてはならぬ。

□従つて、愚夫愚婦の人まで救はれると云ふ意味の宗教であり、それだけ、聖人や賢人でなくては救はれぬと思つてゐた今までの宗教に對してはむしろ新たな一種の普邊の宗教として、天下に誇る可き宗教である。

□従つて、愚夫愚婦の信する宗教と云ふことは自分の理想を如來に等してその然あるべき自分の本質を自分の實力なき爲めに之を實現することができないものとして、自分を自ら愚夫愚婦と云ふのであつて、それは必ずしも、世間一般に云ふ愚夫愚婦として他から之を難すべきの言葉ではない。

□否それどころか、眞に自らの爲すべきことを爲さず、爲すべからざることをのみ爲すものとして、自分の到らざるを深く反省した結果として、そこに現はれて來た懺悔の言葉であつて、之は反て佛にも等しき理想の反省と云はねばならない。

□それを自ら愚夫愚婦と云ふからとて、直に取つて以て之を愚夫愚婦の宗教として難するが如きはその愚や正に救ふべからずと云ふべきである。

## 四

□然ば如來の本願の上に成就せられた念佛とはいかなる念佛であらうか、それは少くとも念佛するものは如來と等しき悟りを開き、自ら佛としての生活を此の土に實現することできると云ふ意味の念佛である。

□そして、此のことは凡て宗教と云ふ宗教の中で之ほど發達し、之ほど完全なるものとは恐らく此の念佛の外にはあるまいと云ふのが私共の信仰である。

□念佛を申して佛となる。之を他の人から聞いたなら、念佛申した位で佛になれるか、そんなことで佛になれるものならば念佛以外の人々は何んであつた難行や苦行をするものかと之が一般の考へである。

□乍然それならば念佛申して成佛ができぬ位なら誰が念佛などするものか、現に今も尙念佛するものがあることは即ち念佛して佛けになれる證據でないかとも云へば言はれぬこともない。

□そして念佛申した位で佛になれる位なら、念佛以外の人々が何で難行苦行をするものかと云ふことは未だ念佛の眞意を知らない所謂俗流の愚人の言葉とも云へば云はれぬこともない。

□乍然私共の意味する念佛は決してさうした對他的の念佛でなく、今や私共自身が現に如來の本願に呼び醒された本心の中からあふるゝ口稱一行の念佛であつて、それより外には行き道のない全身合掌の生活を云ふのである。

□天地に充てる如來の御光りに照されて、私共の心は今や寸毫の疑いもなく、一切を如來に献げて其の慈悲にひたるの生活を云ふのである。法然上人の「火は高きに昇り、水は底きに流るゝが如く念佛成佛は自然である」と云はれたのもそれである。

□無理のない念佛、自然に如來の本願に誘はれて申さずにはゐられない、歸命の念佛が即ち私共の口稱の念佛である。天地の萬有何物か之を離れて眞實の世界があり得やう。

□子は親なくして生れることのできないやうに、私共は如來なくしてはあり得ないのが此の世の實際である。少しく眼を放つて天地萬象を見るがよい、凡そ此の世の中に何一つとして、天地の力なくして存在しうるものがあらうか。天地の力は即ち如來の御力である。

□如來の御力は本願の現はれである。何ものをも生かさずにはおかない力、その力こそは萬有の生命である。而て此の生命こそは即ち如來の一切を生かさずはおかないところの本願の力である。

□此の力に合掌し、此の力に歸命してそこに生るのが念佛の生活である。だから念佛の生活は天地の生命に歸するの生活であるとも云へる。また念佛の生活は如來と共なる生活とも云へる。

□従つて、如來を離れて念佛もなく念佛を離れて念佛もない。念佛と佛とは一体である。念佛を通して佛を見、佛を通して自分を見る。自分と佛とはそこに至つて一体である。

□愚夫愚婦の宗教とは愚夫愚婦も救はるゝの宗教と云ふ意味であり、又愚夫愚婦の救はるゝ宗教と云ふことである。前者は賢聖の人も救はるゝが愚夫愚婦も救はるゝと云ふ宗教の普遍を意味し、後者は如來の大慈悲はむしろ凡夫を先きとすると云ふ如來の大慈悲を意味したるものである。

□此の意味に於て、如來の大慈悲がいかなる罪深きものをも救い、いかなる愚かなるものを救ふと云ふのがむしろ此の淨土教の一大特色であつて、そこに所謂人類の宗教として、眞實佛教の展開を見るべきである。(一九三〇、四、五、越後見附にて)。

## 理想と現實

土屋觀道

### 一、理想の發生

□理想を現實と比ぶれば何一つとして思ふやうになるものはありません。之は一体何故でありませう。世にはともすれば現在の生活を以つて、そのまゝ自分の理想の生活だと云ふ人もありますがそれには色々の條件がついての上のことではないかと思はれます。

□従つて、若も私共に初めから理想がそのまゝ現實であると云ふ人があるならばその人は少くとも初めから未だ何等の理想も無かつた人と云ふべきでせう。何となれば本來私共の理想と云ふものが初めからあるものではなくて、少くとも私共の心に起つて來る理想と云ふものは私共の現在の生活にあきたらぬところから起つて來るものであるからであります。

□従て、私共の理想は現在の生活に満足のできないとき、それに對する私共の不満が何とかして之を無くしやうとの心となり、その心が消極的にはいかなる状態に之を無くしやうかとの考へとなり、積極的にはいかなる状態にまで之を指導しやうかと云ふところに、初めて私共の理想と云ふものは確立して來るからであります。

□従て、此の意味から云へば私共の理想は寧ろ現實にあきたらないところから起るものであつて、理想に對して現實はいつも否定の立場にあるものであると云はねばなりません。何となれば若しも私共に現實と理想とが己に一致してゐるものであるならばそこには現實の外に理想なるものはないからであります。

□乍然、それならば現實と理想とは永久に一致するものでないかと云へばそれはまた決してさうではありません、否それどころか、實はその理想がやがて此の現實と一致することのできるものであつてこそ、眞の理想と云ふものであつて、それができぬやうではそれはたゞ一種の空想に終るものであるからであります。

□だから眞の理想とはいつも現實の上に立脚するものであつて、その現實の中に於て、私共の生活に満たないものがあつたとき、之等無くした生活になりたいと云ふところに一つの理想境が考へられるのであります。其の理想はやがてまた現實の生活の上に味はれるものではなくてはなりません。

□従つて、其の理想と云ふものにも色々の理想と云ふも

のがあります。其の人の個性や、其の時の社會の状態によつて、可なりに相違するものがあると思ふのであります。

## 二、時代と思想

□此のことは少しく時代と思想との關係を研究して見まするに其の間可なりに密接な關係の存することを見るのであります。何となれば時代の推移は自然の姿として己に私共の理智では動かすことのできないものであります。其の推移の状態がまた一つの法則のもとに變化して行くのであります。そこには時代の思想と生活との關係が重大なる役をなしてゐるのであります。

□從て、そこには人智の未だ進まない時代から、今日に至るまで可なりの變化が私共の上に来てゐるのであります。それらの一々を眺めて來ますれば私共の願いや考へもその時代々々によつて、可なりにその性質や内容を異にしてゐるのであります。

□從て、そこには私共の生活に於ても、社會の組織の上止むなき變化が來ると同時に、私共の不滿や願いや、理想が異なつて來るのであつて、そこには自ら思想や信仰の上にも可なりに異つたものとして現はれて來るのであります。

□それは私共の生活が時代の相違によつて自然と異つて

ところに所謂人類の文化があり、變化があるのであつて、そこには自らまた一貫した向上の一路も輝いてゐるのであります。

□從て、私共の今真にかまんとし、真に求めんミするものも、其の要は正にこゝにあつて其の人生の要求の根本に向つて之が完成の天地を創造しやうとするところに、眞の理想を見るのが私共の生活であります。

□即ち言かへれば私共の今日の生活が常にかう云ふ意味に於て、前途に一つの光明を認め、此の光明の中に此の光明を中心として、常に現實をして意義あらしめやうとするところに私共は人生の眞意義をも認むるのであります。

## 三、思想と信仰

□此の意味からして私共には色々の思想もあり生活もあるが如く、亦私共には色々の信仰もあるのであります。

乍然、それは要するに、其の時代と生活との相違につれてそれに相應すべく變化する思想の如く、其の思想に相應すべく其の信仰の變化するものも亦止むを得ぬことでありませう。

□否、寧ろさうあつてこそ、眞に思想とも云い、又信仰とも云はるべきであつて、眞に人類の向上發達を是認する限り、之は當然にも許さなければならぬことでありま

來る爲めに、私共の考へや要求も自然とそれに相應すべく考へられて來るのであつて、そこに昔のまゝのやうな考へや願ではそれを満足することができないからであります。

□此の意味に於て私共の理想なるものが昔の人の理想や生活と一致しないのも決して無理からぬことであります。從てそこには時代と思想との關係が常に私共の生活と重大なる關係にあることを知る可きであります。

□然ばその理想と云ふものも今日の理想が必ずしも明日の理想とはならぬことになり、かくては理想と云ふものも、果して眞の理想となり得るかは可なりに疑問となつて來るのでないかと云ふ人もあります。

□乍然それも亦よく考へれば無理からぬことであります。之を實際の上から望むれば必ずしもさうとばかりは考へられぬ点もあります。それは何故かと云へば私共が生物であり、人間である以上は其の人間であり生物である点にまで私共の生活が急激に變化するものではなく、寧ろ此の變らざる生物であり人間であるところの何ものかを充たさうとするところに、常に變らぬものがあるからであります。

□而もその變らぬ点があると同時に、その生物として人間として、常に向上し發展して、眞實に生きやうと云ふ

す。

□乍然それと同時に私共の生活なり思想なりが、常に私共の生活を通じて、無限の向上として價值つけられて行くところに更に變らない一貫した思想と生活とがあるやうに、信仰にも亦その点のあるべきは云ふまでもないことであります。

□從て、思想と信仰とは此の意味に於て、常に一致し相關して行くものであります。否、寧ろ或る意味に於ては思想と信仰とは全く一なるものであつて、思想と信仰とは全く別なものではないのであります。

□殊に思想と信仰とが離れない点に於て、一つの思想は更に一つの思想に對立し、或は統一せられて行くものであつて、其の究極には更にそれらを統一するところの根本原理にまで到るときそこには思想と信仰とが全く別なものではなくるのであります。

□而て私共の理想と信仰とは全くこゝに不二のものとなり、其の思想は此の理想を産み、此の理想は更に此の信仰を産んで、此の理想を實現すべく考へられた信仰はやがてそれを此の世に實現すべく努むるに到ります。

□此の意味からして、思想と關係のない信仰もなく、信仰のない理想もないのであります。それらの思想も信仰もはたまた私共の理想生活も此の土を離れて別に他方

土にあるべきではありません。

□従つて私共の生活は常に現實を離れず、現實の生活を中心として、その中に眞實の理想を實現すべく常に努力して止まないのが本當の人生であります。

#### 四、實際と生活

□乍然特にこゝに注意しなければならぬことは實際と生活の關係であります。それはいかにも理想が高く、思想は堅實でありましたが、此の世は自分一人で行かざるべきものでなく、人と共に社會と俱に生きて行かねば之を實現することのできないものでありますから、常に此の点を考慮の中へ入れておかないと、反て理想高きだけに失敗も多く亦失望も多いことかと思ふのであります。

□それにつけては單なる私共の空論では之を充たすことができないから、常に自分と周圍との關係を反省して、一切の過去の經驗と現在の事象を考察して來るべき將來に向つて全身の努力をなすべきであります。

□その意味に於て、私共の生活は常に永生と向上との生活でなくてはならぬことは云ふまでもありません。乍然此の世の多くの人達は未ださうした生活の實際を自覺してない人が多いのであります。

□否、たといそれらに自ら醒めたり云ふ人におきましても、ともすれば其の日の生活に逐はれ、其の事柄に左

右せられて、眞實の人生を見失ふ人が多いのであります。之は特に私共の心から反省して忘れてはならないことでもあります。

□尙最後に於て、私共が一つの理想を實現するについで忘れてならないことはともすれば私共がその理想を實現するにあまりに急であつたり、あまりに不急であるために、折角の理想がとうとう實現するの機會を失ふことが多いことです。

□之は自分の力の足りないが爲めと云へば一言もないこととありますが、そこにはまた私共の反省が充分に行き届かなかつた爲めに多くの豫期せぬことがらに左右せられることの多いのを忘れてはなりません。

□乍然それにして理想は要するに實現を尊ぶ、徒に實現を無視して空想を事とするが如きは反つて理想の爲めに現實を失ふものであります。それは反て人生を毒するものであります。此の点に理想と空想との相違であつて私共の注意すべきところであります。

□而て此のことは特に多くの宗教家にあり勝ちのこととあり、又多くの昔の信者にありがちなこととあります。之が私が特に道友の御注意を願ふところであります。

(一九三〇、三、三三)。

## 行基寺三昧會雜感

土屋觀道

□本年の行基寺、三昧會は例年の四月十一日からのを繰上げて三月二十五日から一週間となりました。私も近頃は各地の三昧會にもあまり出席しないので念佛の不足を感じてゐた際とて、今年こそはと二十四日に東京を立ちました。

□夕方に山崎に下車すると行基寺様が御迎えに來て頂いて居りましたが、昨年比し今年は一人の連れも無いので少々淋しいなと云ふ心もしましたが、伊勢の巨石の道友が四五人先着の由を聞いて少々元氣も出たやうです。

□それでも段々山に登るにつれて私の心には今年こそは私も全身を念佛に込めやうぞ、集る人が少いのは何となく淋しいが、まだそれだけ念佛するには此の上もない都合である。人のみ多いのが三昧會の誇りでもないからと思はれました。

□けれども折角の三昧會に集る人の少いのは道友の集りとしては決して成功とは云へないがそれには何かの原因がなくしてはならない、その第一には私共の力の足らぬこ

ともその一つであらう。

□第二には四月が三月となつたので、花見氣分の人々が全部だめであり、第三にはその月の月末と云ふので商賣關係の人々は來らない。第四には行基寺の三月はまだ寒い。第五は各地に於ける氏神の祭禮にかち合つた。第六には近頃の不景氣がやつぱり之にも關係したかとも思はれた。

□名古屋の方では熊野上人の授戒會ともかち合つたと云ふこともその一であつたと云はれないこともない。其の他私が近頃あまりに各地に出ぬために、各地の道友の念佛氣分が或は昔ほかになくなつたと云ふことも全くないとは云へぬかも知れぬ。

□乍然それと同時に今年の集りはその割合に青年が多かつた。その上に今までにない新しい道友の多くが見えたことは全く近年にない一つの大きな事實である。之は一体何故であらうか。

□而もその集りが例年に比して静寂であり、その静寂の

中に可なりに強い求道の輝きが堂宇の中に充ち満つてゐたことは私の心から喜びに堪えないところであつた。

□人生の眞意義に目醒めた道友の集りほゞ私の心に限りなき喜びを傳へるものはない、人生の眞意義とは此の世に眞生を得とする眞人の生活である。望みと力と喜びとの中に如来を中心として生きやうと云ふ同志の集り、私はそれが何よりの成功でないかと思ふ。

□中には自分の急がしい仕事を放棄して、僅に一日二日の中を遠いところからわざわざやつて来た人々もあつた、そして反つて僅な其の日の中に永年期待した望みを達して、天地の大道を叫んで歸り行く青年も見えた。

□中には毎年毎季によつて例の如くはたからは見ゆる念佛者の中に、反つて今までにないしつくりとした念佛の中に限りなき喜びと望みの中に歸り行く道友もあつた。

□或は自分の一生を今度の別時に解決すべく殆ど身命を屠して来た人も可なりにあつた。他から見るとはさういふこともその人にとつては重大なことがらもある、而もその重大なと思つたことがらが、わけもなくその人の前途に解決せられて行くことはその人に於て之ほゞ楽しい人生はない。

□殊に私の中でも最も嬉しく感じたことは今度の別

時ほゞ初から終りまでしつくりした念佛のあつたことのないことである。之は正しく道友の限りない熱心さの然らしむるところでもあらうが、或は反つて集る人の少なかつた賜であつたかも知れぬ。

□集るもの三四十名から六七十名が極度であつた、それでも私の心には近頃のない喜びと望みと力との生活であつたことは私にとつては此の上もない仕合であつた。而もその中でも夜の座談會が例年に比して毎晩心よく相互に語られたところである。

□之も一へに當行基寺上人始め寺内の御一家の限りなき御盡力によることはもとよりであるが、それと同時に集つた道友の限りない各自の奮勵と道友先輩の心からなる御世話の力にあつたことももとよりであらう。

□今次の集りは七月唐澤の別時である。願くばかうした氣分で心からなる道友の集りが願いたい。(三〇、四、五、越後見附にて)

信仰は地下を流れる

鐵管の水のようなものである

音をたて、流れてゐるが

音も聞かぬ

それでゐる地上百萬の人を活かし

活潑々地、無量の仕事をさせてゐる

信仰は總てのものの生命である

活力素である (克)

### 念佛三昧會所感

高子

この度は御別時の御話はさながら私ひとりのためにお説き下さる様におもつて承りました。最初の夜の夢に「かごとうろくはよみしやと母にきかされて、それは法然上人の和語燈錄の事ではなきや、それならばよみまし」と語つて居るゆめを見まして、日頃御したひする御然上人の事についてゆめを見た事と、その日の御上人の御話の親鸞上人の御話のやうであつた事とを思ひ合せていと尊く感じさせて頂きました。

全く此度の御上人の御話は法然上人、親鸞上人の御話だと思つて承りました。絶体の如来のおじひを常にあれほゞ信じて居り乍ら私はいつの間にか迷雲にとざゝれてゆき、おじひに甘へてしまつて居た様で御さいます。そう感じては身も世もなき迄自分に腹立しき迄はづかしくなりしました。

淋しい家、淋びしい子の燈明となるべき自分に光りと力をめぐまれてかへりし様で御さいます。わ子ふたりありといふことをみ佛に

よろこびまつりかしつかんおもひ

### 偶感

觀道

自分の親が他人から罵られるのを聞いて腹が立たないのは自分も亦、その親と一緒に罵つてゐると同じだといふことがあつた。それならば其の人と共に其の親を罵るものは一体さんなものであらうか。少くとも私共の道友の間にはかうしたおろかしい者は在つて欲しくないのである。

# 吾朋便り

□朝鮮 山口常照様より

餘寒いまだ去りやらず候も何となく春めき申候儘で世外に軍縮會議、内に總選舉にためまるしき事に御座候今回は椎尾先生の應援には出動遊ばされ候はずや、先頃は妙定院に於て信仰會議開かれし模様、深く内容を知るに由なれどもさかく如來を中心に、眞生の道の開け行くは何となく欣喜の至りに存じ候今後も青年のもの中心にお互に異端よばはりを避けて、念佛の中に一致點を見出し俱會一處如來道の体现こそ望ましく存じ候當地の盟友一同も念佛の体験に、眞生道の實現に努力罷在り候間御休心被下度候

(中略)

光道さんにも日増し御成長いつも紙上に親心の程讀まして頂き家内とも御うはさ致す事に御座候。又美智子さんも良子さんもいよ／＼姉さん振りを發揮遊ばされてある事さ存じ候。當方もお蔭をもつ

て光彦は本年より學校へ入學致す事相成、既に入學手續も了し候。明彦も亦本年より幼稚園入り、來年は引つぎ入學する事相成候壽彦は本年いよ／＼三つになり、よち／＼歩いて目下一家中の人氣ものに御座候。一月十四日以来、風邪におかされたり、胃腸を害したりして未だにハッキリ致さず少々困り候も大して心配する程の事は御座なく候

(中略)

本日は二男明彦の第五回誕生に御座候子供は今朝より僕の誕生だ喜び居り申候。

□越後 渡邊八右衛門様より

冠省原吉郎様の候補に付御繁忙中態々御來柏被下、連日に亘り熱烈なる御後援被下、御蔭様にて實に望外なる高點にて當選の榮を得られし事は、我等とて感嬉此上もなく又國家の爲め慶賀の至りに候。茲に謹んで上人の御深恩奉感謝候

早速御禮並に御報告可仕の所、總選舉直後當町豫算町會招集せられ、加ふるに月末勘定等の爲途御無沙汰申上申譯之無候、平に御容被下度候。此一日午後三時

より眞光寺に於て會員五十餘名相集り、感謝念佛會開催五時より晚饗會に移り、野生の祝詞、原吉郎様の御禮演説、夕食後座談茶話會を開き、席上各員の感想及選舉運動中の心情等を思浮べ遂々十時と相成、漸く散會致しました。

終りに原氏の萬歳を三唱し、眞生會の萬歳を三唱致し、實に大々盛會裡に目出度終りを告げました。祝電雖有皆様に申上げ一同合掌仕り候。

□見附より 土屋觀道

愈々四月となりました、各地の皆様には御變りも在りませんか、御案申して居ります。次に私共一家にも近頃は皆無事一同慈光裡にありますから乍他事御休神下さい。

□去月十四日は善導大師の千二百五十年忌云ふので京都では非常の賑ひでした。殆ど十三、四、五の三日間は丸で知恩院の境内は人で全くうめられて居りました。

た、私も幸い此の十三日の夕方から十六日の夜まで彼地にまゐりまして此の祭禮に参加することを得たのは全く望外の仕合でした。

□その中で最も嬉しかったことは之だけ

の多くの人々が善導大師の遺思を中心として集つた云ふことでした。そしてその間に於ける私の感想は之等の人々が全く宗教心からばかり集つたのではないこと云ふまでもないことであるが、それでも角大師を中心とした遺思として集つたことは何となく有難いことだと思ひました。

□そしてまた、各地から集つた多くの僧侶の方々を何百と一所に見ることのできたのは何とも云へぬ同宗の僧侶として暖かい何かを感じずにはあられませんでした。信仰はなくてもかうした僧侶が皆愛宗の念と宗祖を思ふ云ふ一念に於ては皆同感であらうと思はれたことは何となく嬉しい感じでした。

□その中でも、殊に嬉しかったことは多くの舊友が計らずも一緒に會することのできたことでした。何だか二十年もの昔が一時に歸つて来たやうな感じで昔年らの友情が一時に味はれたことはさすがやうこそ来たなと云ふ喜びでした。

□十六日の總志學會に於ける信仰座談會

は盛會と云ふほどではありませんでした。が、若し集つたもの、熱心なもの、各自の信仰を中心としての各自の生ける道とを共俱に語ることできたのは今度の御遠忌としては最もふさわしいものとして感ぜられました。

□而もその中で一番強く感じたことはその割りに宗祖の信仰を研究してゐる人のあまりに少なかつたこと、それを現代に生かすことをあまりに強く感じてゐないことでありました。

□尤もそれは會そのものが主として各自の信仰を述べ合ふやうなものであつたからでもありませうか、乍然その各自の信仰と生活とが宗祖の信仰と生活とに於ていかに關係を持つたか云ふことを聞くことのできなかつたことは甚だ遺憾でありました。

□そしてまた、今度の祖の集りが主として御祭りさわざきに力を入れ過ぎて、遠慮をして永く民衆の生活の上に記念するもの、少なかつたことは何となく残念なことと思ひました。

□之は今までの浄土宗としてはいつもあ

り勝のことではありますが、今後の宗教としては少くとも大いに考へ直すべきものがあるではないかと思ひました。

□次に行基寺の集りは別紙の通りです。

承るところによれば來年は四月の十三日からにじやうの事です。どうせやるならば今少しく道友の集り易い時の方を選ば方がよからうとの事でした。

□之も亦一理ある事として考へればならぬ事ですが、念佛は主として各自が自分に眞劍に生きる爲めの念佛でありますから、どうも今後とも共俱に心よく進め合つて行く方がよい事かと思ひます。

□私も久々で心行くばかり念佛が申されて、限らない喜びに充たされました。

□四月一日には早朝四日市に向い、その夜行で歸京しましたが、四日の夜行で柏崎に立ちました。柏崎にまゐります、原様始め渡邊、會田、岩下の道友が御迎え下さいまして原様方へ落つきました。東京の神谷様も私の前の列車で先着でいた。

□午後は神谷、岩下の御二方と見附に向

計らずも一緒になり共俱に喜びました。奥様は長岡で別れたが、長岡からはまた今井の弟さんと一緒でした。只今は丁度今井さんの御二階で此の原稿を書いたところですよ。(三〇、四、五)

【岐阜縣 長源寺様より  
南無阿彌陀佛

さて先般祖山御遠忌の際は拜顔致ししかん御話も出来ず失禮仕候。今回行基寺様に於て御化導に付愚妻儀始め該地の信者大に樂んで居られ候處愚妻儀は御遠忌より坂寺風邪にて就床行基寺様参加せんと只管加療醫藥を友とし靜養致候得共益々不快にて今回は誠に残念ながら拙僧も看護の役にて外出も出来ず從て不參の段不惡御賢察被成下度候。他の方も夫れん差支之有不參致され候先は不致取御挨拶旁如斯に御座候。合掌

【名古屋 半田忠義様より  
南無阿彌陀佛

此の度は私儀が outcome して色々御世話に相成り難有う御座います。御上人様の御熱心な御話を承りまして、本當に今迄の心の中の暗が晴れ何んとも云えない喜

びと嫌きが心の内に出来まして、見る物聞く物が皆美しく美しく見え聞える様に成りました。此れと云うも如來様のお惠念佛の力、御上人様始め皆様のおかげと喜んで感謝して居ります。私は今の喜びを今後一層大きくならんことを願ひ念佛をさせて戴かうと思ひます。本當に色々御教道に相成りまして難有う御座いました。今後共に宜しく御願申上ます。

【岐阜市 松浦重三様より  
南無阿彌陀佛

其後は打絶えまして御無音に打過ぎまして失禮の段何卒御赦し下さい。扱當地道友も毎月第二日曜日の晩中野先生の御立寄りをお願いしまして御指導を頂いて細々ながらも不斷の精進をつづけて居りますから御安心下さい。御蔭を以ちまして太田様、長沼様など熱心なる有力な方々の道友を與へられまして喜んで居ります。折から去る九日夜丁度中野先生の集りの席にて古賀様より土屋上人様には来る十八、九日頃御立寄り下さる由御發表になりましたから其日を御待ち申上げました。

が、承りますれば御子様の御病氣にて京都より即刻御歸京の趣きにて残念に思ひました。今後御下阪の途路には是非御立寄り下さる様御豫定を願ひます、一夕の講演會を催したく存じて居ります。

行基寺の別時も目前に迫りました。是非一日たりとも隨喜致したく思ひます。當地は相憎氏神祭典前加ふるに月末ともなり参加に苦しみ申します。

【大阪 藤村章様より  
南無阿彌陀佛

好時節と相成りました。御上人様には選舉已來御活動續きにて御目ざましくもうれしき事で御座います。神谷様からの御便りに越路にてそりに御召し遊ばした。活佛を慢畫入りの御手紙にて寒い處を同友のための御ちから添へる力強くもまた御すがたを思ひうかべておかしう存じました、其節御越し合せ中の尼ヶ崎橋本様、秋葉様の奥様、野田様など、御うわさいました事で御座いました。

此度の智恩院御忌に就き御光來の御由十四日圓平寺様より伺ひ、十四日の夜分に宅へ御越し頂けるとの御便り夢か

ます事を存じまして皆様もかへられまします事にかして私宅へ行てやろうと思召て頂いた事とゞうれしく存じます。兼てよりまら兼て居ります行基寺様の御別時最早日限もせまつて参りました。宅には何のさしつかへ御座いせんが横山が病氣いたして居ります上にに次男が二日から肺炎のあきがはかんしく参りませす、臥つて居りますので長男を預つて居ります横山も容体次第で入院をさせようかとも存じて居りますので、毎日ごたくいたして居りまして御がへし延引いたしました。源彌の百ヶ日廿九日御座いますのでごうかして一日でも隨喜させて頂きたく都合よく其日を得られますやういつて居ります。

【大阪 豊田省三様より  
南無阿彌陀佛

其後は御不沙汰をいたして居りますが何時も御健勝で道のために御活動下さいませ事深く感謝いたします。本月十四日知恩院の善導大師御遠忌に参詣いたしました。留守の處へお尋ね下さいましたそ

うで家内より承りました。お目にかゝらなかつた事を残念に存じました次第であります。

又上人にも全日御上京祖山を訪れになつたが家内が申して居りましたが私も上京いたしました如何にも盛大に御遠忌が動まつて居りましたのを見て感激いたしました次第であります。

善導大師と云へば支那の方であります。吾々同胞がかくも盛大に其の徳をたへ國境を超越した態度が現はれて居りますのを見て、如何にも日本人の偉大なところも何はれ欣快に堪へない気分がいたしました。此の様子を支那の人々に見せてやりたい感じがいたしました。併し全日は御遠忌大法要中の中日でありますので雑答のため親しく大阪へ昇ることも出来ず表で遙拜した様な事で祖山はよい加減で下山しまして、岡崎公園の宗

教傳を見物いたしました。甚だ申憎い様ですが佛教の元氣がないのに誠に遺憾な感じがいたしました。大本教の態度に激刺たる生氣が見えて居りましたので、教理は別として大に感心いたしました様な事

ばかりうれしく十一時頃まで御まち申上て居りましたが御越し頂けません、十五日に京都へ親子三人連れて参りまして、神戸の藤村様に御目にかゝり御上人様に此處で御目にかゝつたが、今日はさても御集會で御出ましになるまいとの御うわさで御座いしましたが、一日なりとも御拜顔いたしたくおたづね申上りましたが、これも御目通りは六ヶ敷と存じました。其時につくんとお思ひました。同じ場所に居り合せながらごんごんにしても御拜顔のかなわぬ時は致も方のなきものさあきらめて歸阪いたしました。

芦屋の停留所へ着きましたら同じ電車で野田様が見へまして今晚御上人様があなた宅へお見へになりますよと仰いましたので大急ぎで歸宅いたしましたら曾我尾様おけはつれんと御上人様がお越しになるさうですれと仰つてまつてお出で御座いました。其日も野田様の事に就き種々御上人様の御さしなご伺ひたゞ有難存じました、十時半まで皆様ご一し

よにおまち申しましたが、何しろ全國の集りにて御上人様も御多忙に居らつたや

で佛教もあんな事でもなまなま居つては到底今後の期待が覺束なからふと思ひました。茲に一層吾々の眞生運動の要を感じたのであります。

目下道友各位には日々御熱心に御修養の事を存じます。何時も参加したいと思ひながら俗務にしばられ思ひ切つた修養も出来ずぐづ付いて居る様な事でありませす。何れ其の内には快よく修養の出来る日も来やうかと思つて居ります。併し月日は容赦なく過ぎて行くのにそんな悠長

試代拂込並寄贈者御芳名

- 五拾圓 柏崎原吉郎様、○七圓 福岡武田哲哉様、○五圓 宛 大阪市阿波野、藤田ッ
- メ様、東京野津仲 様、柏崎桑野喜太郎様、○貳圓 宛 神奈川三次六兵衛様、和歌
- 山小阪信孝様、岐阜片桐照子様、愛知田中義雄様、○壹圓 宛 岐阜早大熊文一様、若
- 園清作様、山口禪梁様、伊藤友三郎様、尾關栗洞様、舟木政太郎様、長沼伊三郎
- 様、河瀬音吉様、林重太郎様、遠藤道子様、西村作十郎様、松浦重三様、竹村清
- 音様、伊藤花子様、伊藤彌左衛門様、柏崎大橋スイ様、原長一郎様、村山みれ様
- 渡邊三十郎様、廣川浩三郎様、高野政五郎様、山田美子様、小林イク様、新津
- 眞吉様、猪浦博次様、神奈川正業寺様、小川廣雄様、竹内倉吉様、大阪市原春晃
- 様、○五拾錢 岐阜仙波様、○五圓 大垣市佐藤秀夫様、三重縣八島七郎治様、○一
- 圓 岐阜縣圓心寺吉田恢心様、名古屋惠本久子様、名古屋森野清三郎様、○五圓 名
- 古屋崇徳寺様、○二圓 名古屋永田貞雄様、今西臨賢香様、

な事を云つてさお笑ひになるかも知れませんが又一面こんな事を考へながら俗務にふれて居ります。又俗務そのものが單なる俗務でなくて一々佛作佛行の感じもしまして一層元氣が充ちて歡喜の裡に着々運んで行ける様で日々難有く暮らさせて頂きます様な事でありませす。誠に失禮をいたして居ります事を呉々もお詫び申し上げます。どうか道友の皆様へよろしく御風聲をお願いいたします。

(大正十四年八月十三日) 昭和五年四月十日印刷納本 (毎月 回十二日發行) 第九卷第四號  
 (第三種郵便物認可) 昭和五年四月十二日發行

本誌定價  
 一部 金 十 錢 郵税共  
 半年 金 六 十 錢 全  
 一ケ年 金 一 圓 全

註文の注意  
 ●購讀希望者は代金を添へて御申込下さい  
 ●誌代は總て前金御拂込の事  
 ●送金は振替によるのが便利  
 です

昭和五年 四月 十日 印刷納本  
 昭和五年 四月 十二日 發行

東京市芝區芝公園十四號地九番  
 發行兼 編輯人 土屋 觀 道  
 印刷人 百々治之助  
 電話四(5)二九三番  
 名古屋市東區鍋屋町二丁目  
 印刷所 龜山田活版印刷所  
 電話東(4)三三三・三三三

東京市芝區芝公園十四號地九番  
 發行所 眞生社  
 振替口座東京四七二八八番